恩師の思い出

最初の授業を鮮明に記憶

春日 輝海先生

山田 徹郎（高11回）

●やまだ・てつろう
七久保中学1年の春休み、二・二六事件の映画「叛乱」を見た。青年将校の中心人物安藤大尉の人柄に魅了され、少年の心は感動で胸がうち震えた。以来関連書籍を読み、近年は都内の事件跡地を屡々訪れたりしている。

【春日輝海（かすが・てるみ）先生略歴】
1925年伊那市生まれ。旧制伊那中学校（現伊那北高校）を経て東京高等師範学校（現筑波大学）を48年卒業。53年4月から59年3月まで数学科教師として飯田高校に勤務。東京高師在学中の45年5月25日、米軍の無差別爆撃の悲惨さを体験されている。

昨年の11月3日文化の日、97歳になられる春日輝海先生からご自分の「半生の記録」が送られてきた。

先生は1953（昭和28）年に飯田高校（当時は飯田高松高校）に赴任された。偶々私の家内の実家（農家）の離れに、初任校で見染められたお若い奥様とお子様ご一家で下宿されていた。私はこの家に時々米や野菜を貰いに行っていたこともあり、中学生の頃から先生のことを存じ上げていた。

高校に入学した最初の授業（幾何）でご自分の生れてからそれまでの経歴を特徴のある大きな声で話された後「ところで諸君、私は何歳と思うかネ」と言われると、生徒達は一斉に大声で「50！」。先生はその時30歳であったが頭髪が少々薄かった（先生ゴメンナサイ）こともあり、悪戯盛りの高校1年生らしい反応だったと思う。すかさず先生は「私が折角時系列に沿ってキチンと話したのに、私の年齢を正しく推定できない。そんな諸君らは数学的センスがあるとは言えないネ」と苦笑いされたことを今もって鮮明に記憶している。

3年間数学を教えて頂いた。私は52歳で東京湾水先人となり日々多くの外国船を扱い、それらの船の特徴、船長、乗組員のことなど日記風に書いて、春日先生や国語とクラス担任された唐澤秀雄先生、さらに小、中学時代の恩師に送ると、どの先生からも懇切丁寧なご返事を頂いていた。

50年間海と船に携わっていたことから、夢の中で自分は一生懸命航海当直しているのに何故か突然目の前に他船や島が現れて衝突しそうになって魘（うな）されることが今もってある。そんなことを書くと先生も「自分も授業を始めようと教壇に立ったが、全く準備しておらず何を教えてよいかも分らず、右往左往する夢を見ることがある。夢の話だから罪のない話題も時にはいいね」。

2013年10月、高卒55周年に参加するため家内と車で鎌倉から飯田に向かい、伊那市の先生のお宅に伺い55年ぶりに再会した＝**写真**。米寿ながら高校時代と全く変わらずお元気で、退職後は奥様と2人でほぼ全国をご自分の車で走り、今は無農薬野菜を作っておられることなど楽しそうに話された。

その先生も、今は諏訪湖の畔にあるホームで奥様とご一緒に静かな余生を送られている。